海外学界ニュース

Étienne Lamotte 教授の御逝去とフランス仏教学の最近の趨勢

白土わか

本年五月五日、我々は偉大なる仏教学者 É. Lamotte 教授を失った。それはまさに、巨人の去りゆく足音を聞く思いであったが、同時にまた、ひとつの時代は去ったという実感でもあった。

先生が秀れた仏教学者であったことは、今更改々を要しないが、『大智度論フランス語訳註』五巻の二五〇〇ページにのぼる大作をはじめ、『解深密経訳註』『摂大乗論訳註』『成業論訳註』『維摩経訳註』『首楞厳三昧経訳註』『インド仏教史』等々の、厳密な文献学的方法を経て解明された仏教思想の道標は、不滅の金字塔として今後も後進を導き続けることであろう。かつて、Lamotte 先生の知友、故 P. Demiéville 教授は、『大智度論訳註』について、「この書は西洋流にいうなら、Lamotte 師の上には恩寵が見出されるというべく、かつ正確・適切・明晰な註を付したフランス語訳は、今までいかなる言語によってもなされなかったところである①」と絶讃し、それより五十年前、Louis de la Vallée Poussin 教授によって訳出された不朽の名訳『阿毘達磨倶舎論訳註』に比肩すべきものといわれたことがあった。またスイスの J. May 教授は「ルーヴァンの師はその取り扱うすべての題材を、徹底して明快に示し得る絶大の才能を持ちあわせている②」と讃えたことがあった。

これらの証言は、Lamotte 先生の業績の輝かしさを最も適切に伝えているものといえよう。そしてまた Demiéville 教授が「Lamotte 師」といい、「恩寵」ともいわれているように、Lamotte 先生はカトリックの司教であられたのである。カト

リック教徒の先生が仏教学研究に生涯を捧げられたことについては、ルーヴァン・カトリック大学の D. Donnet 教授のことばに聞いてみたい。教授はいう、「師は心底深くに根を下ろした誠実なキリスト教徒であり、キリスト教徒の模範であるが、このキリスト教徒は、いかなる意味に於ても護教的な目標を立てることなく、仏教研究に生涯を捧げたが、それは最も開かれた精神によって導かれたものであった。独断を排し、自らに真理ありと自負し他を誘いこもうとする高慢な自信を拒否するものであった」③と。Donnet 教授が明言するように、最も開かれた精神に導かれた識見と勇気と気迫こそは、先生の学問を貫く根幹であり、何人の追随をも許さぬものであったことを改めて知らされる次第である。

ブリュッセルの書斎にて

晩年の先生は『大智度論』研究に心血をそそがれたが、『大智度論』の般若波羅蜜は、キリスト教徒の先生御自身にとって、どのような意味あいを持っていたのかをお教え頂きたかったと、私は勝手に考えるが、あの大部の『大智度論訳註』の、超人的なお仕事がそれを自づと伝えているのであろうか。

先生はまた謙虚な方であった。私はかつてルーヴァンに先生をお訪ね申しあげる機を得たが、その折、ホテルの主人が Lamotte 先生を、口を極めて讃めたたえているのを聞いて大変に感動したことがあった。宗教者としての先生を改めて考えたことであった。

偉大なる碩学にして高邁な勇気と深い思索と敬虔にみちた宗教者、É. Lamotte 教授の学恩を謝し、御冥福を心より念じあげる次第である。

Lamotte 教授の御逝去は、ヨーロッパとくにフランス語圏内の仏教学に、ひとつの終止符を打ったという意味あいを兼ねている。Sylvain Lévi 教授を頂点とした、フランスの文献学的研究による仏教学は、Lamotte 教授をもって、ほぼ最後とすると言い得るからである。

Lamotte 教授がパリ大学に学んだ一九三〇年頃は、パリは仏教学の黄金時代とでもいうべきときであった。東洋学界の最高指導者 Lévi 教授は、東洋の学問研究の必須条件として仏教学を修めることを奨めていた。その結果、梵蔵漢の仏教のテキストの厳密な対照研究によって、そこから導かれる正確かつ確実な判断を得ることを目的とする、いわゆる仏教研究の文献学的方法が確立していった。その頃のパリには Lévi 教授の他

に、A. Foucher, P. Demiéville, M. Lalou 等々の学者が相次ぎ、ベルギーには de la Vallée Poussin 教授がおられた。そしてまた、日本からも学者がパリに学び、その文献学的方法は日本に齎され、日本の仏教学に大きな影響を与えたことは周知のことである。

しかし、それらの諸学者はすでに亡く、Lamotte 先生もまた逝去されたが、それは往時の諸学者達が鬼籍に入られたことのみを意味してはいない。あの華々しかった学問方法が、ひとつの転機にさしかかったという、時代的な意味あいを兼ねているということである。

その変化は、どうして起ったのか。その理由を尋ねることはまことに難しい。辛じて推察できることは、まず一般の趨勢として、社会学的・歴史的あるいは民族学的な思考法が強くなって、文献解読を経ての哲学的思弁といったことは、やや下火になっていることである。第二には、とくにフランスでは文化史的な学問の傾向が強いから、仏教も文化現象の一部として扱い、思想的に考察することは少くなってきている点が注目される。ただしこの場合、文化現象にあらわれた仏教を追求してゆくことによって、社会現象としての仏教の姿や、生きた仏教の庶民信仰を把握しようとする面も見られる。第三には、学問に地域性と民族性とが重んぜられてきて、仏教が伝播していった地域の仏教の展開とか思想とかに関心がよせられてきているのが認められる。以上あげた点のみで、この問題を言い尽くしているわけでは決してないが、次に現在の大体の状況を具体的に見ることによって、それを補足して考えてみたい。ただしこの点についても、細部の資料に乏しく、十分意を尽くし得ないことをあらかじめおことわりしたい。

現在、フランスの東洋学に於ては、仏教がかなり広く研究されていることは事実である。それは東洋の文化を研究するさいに、仏教は避けて通れない部門であるという理由による。そのことはかつて S. Lévi 教授が指摘したことであった。しかしその時代と現在とでは、仏教への取り組み方に変化が生じているといえるであろう。かつて仏教文献の比較研究から思想解明へと展開し、仏教思想そのものへの関心が高かったのにくらべ、現在は仏教を文化の一様相として見ることに重点が置かれているのではないかと思われる。勿論、これが全部ではなく、仏教の思想的解明に努力されている向きがあることはいうまでもないが、大方の趨勢はこのようなことと見られるのである。

さて、Collège de France 附属のアジア学研究所に置かれている敦煌研究班（ERA 438）は、H. Soymié 教授を中心とする研究グループであるが、その最近の仕事としては、国民図書館蔵の Pelliot 将来の敦煌文献のうち、中国関係文献の第三目録（No. 3001～3500）の出版がある。これら敦煌資料の大部分は仏教関係のものであるから、必然的にこの研究班のメンバーは仏教学に携わることになっている。Soymié 教授はもともと中国民間信仰の研究を主眼とし、道教に関心を持っているが、仏教については敦煌文献による、『十王経』や地蔵菩薩、目蓮と

いった点で論文を書いておられる。J. Hamilton 教授はウイグル語経典の研究に成果をあげておられるが、敦煌文献の精密な踏査によっている。P. Magnin 氏は天台研究に意欲をもやし慧思についての労作を出されたが、敦煌文献による仏教研究にもあたっている。呉其昱 Wu, Chi-yu 氏は中国の宗教研究が専門で道教の他に仏教については、敦煌文献によって禅関係の研究を行なっている。又、チベット学の R. A. Stein 教授は敦煌文献をもとに、中国の偽経の研究をすすめておられるが、何れ発表されるときも近いことと思われる。

チベット学では Stein 教授の他に、A. M. Blondeau 教授が Ecole Pratique des Hautes Etudes の第五部門で、「ボン教と仏教」という題で講義を行なっている。又、A. Macdonald 教授も仏教に関心を示している。今枝由郎氏はチベット文献学を専門とするが、仏教学の論文も発表している。

中国学関係では、J. Gernet 教授が以前は仏教学をやっていたが、現在は中国思想や道教研究に主力が注がれている。現在フランスでは、道教の研究がさかんであって、前記 Soymié 教授の他に Schipper 教授・Kaltenmark 教授等がおられる。

インド学の J. Filliozat 教授は昨年物故されたが、教授は仏教学にも関心を示されていた。G. Fussman 教授も古代インド宗教の研究と共に仏教研究に意を注いでいる。梵文学の C. Caillat 教授は仏教よりもむしろ、ジャイナ教に関心を示している。又、K. Bhattacharya 氏もインド学の論文のかたわら仏教について書いている。

又、中央アジア学関係は何れも仏教学にかかわっているが、表向き仏教学を立てることは少いようである。説明を加えるべき資料が今手許にないのが残念である。

日本学の分野では B. Frank 教授が Collège de France で、日本の仏教図像学の講義を続けている。日本で蒐集した数千点にのぼる図像資料、とくに寺院のお札類を精密に整理体系づけることによって、仏教信仰のパンテオンを浮かびあがらせ、そこから日本人の信仰の形態、又、仏教思想そのものにも近づこうとしている。仏教学と民族学を統合する新しい研究法である。Frank 教授のもとからは若い日本仏教の学者が出ているが、それは後に述べることにしよう。又、H. O. Rottermund 教授は Hautes Etudes の第五部門で日本の宗教について講義を行なっているが、これは民族学が中心で、日本の行事と民間信仰とか山伏についての研究等である。民族学にはその他、Bertier-Caillet 女史や A. M. Bouchy 女史がいて精力的に仕事をすすめている。又、M. Benisti 女史が仏教考古学の分野で長らく研究に携っていることもあげられる。

以上は、主に文化史的立場から仏教研究に携っていられる向きについて、その概略を述べたのであるが、次に正しく仏教学の部門について概観したい。

A. Bareau 教授の最近の Collège de France における講義は、「原始仏教の地理的分布（事実と伝説の局限）」とか「Polonnaruwa 時代の singhalais 仏教」という題である。現在フランスの代表的な仏教学者 Bareau 教授の、最近の傾向を推察

できるかと思われる。もっともこれらの講義の中、後者はゼミ形式であるが。J. M. Agasse 氏はパーリ仏教の研究家で、E. Denis 氏は『ローカバンニャッティと古代仏教の宇宙観』を出している。④ A. Padoux 氏はインド密教の研究を続けている。Bougoult 氏は『般若経』の研究である。

P. Magnin 氏が中国天台の研究に意を注いでいることは前述の通りである。又、Collège de France アジア学研究所の京土慈光氏は、中国偽経の研究を行なっている。

日本仏教では、J.N. Robert 氏は Hautes Etudes 第五部門で講義を持っているが、日本天台の研究を専門とし、最近はとくに論義研究に専注している。その成果が期待されるところである。F. Girard 氏は華厳学で、とくに明恵について綿密な考察を加えている。この二人の学者はともに B. Frank 教授の門下である。又、D. Gira 氏は源信や親鸞の思想研究を続けている。

又、フランス極東学院でも研究が行なわれていて、スリランカの仏教についての J. Ver Ecke 女史や、カンボジアの仏教についての F. Bizot 氏等があるが、委細に報告する準備を未だ得ていない。

なお、フランス語圏内のスイスでは、K. Régamey 教授と共に Lausanne の J. May 教授が健在であることを忘れてはいけないであろう。

最後に、京都相国寺塔頭林光院内に置かれている法宝義林研究所で行なわれている研究、ならびに『法宝義林』編纂のことに注目しなければならない。この研究所は昭和の初期に、S. Lévi 教授と高楠順次郎博士によって設立されたが、以来現在まで『法宝義林』作成のための努力が払われている。編輯主任の H. Durt 氏は E. Lamotte 教授の門下であるが、専門は仏教経典の研究である。同じく編輯に携わる A. Seidel 女史は中国仏教と道教とを専門とする。同じ A. Forte 氏は中国仏教史、R. Duquenne 氏は密教学・図像学に専ら関心をよせている。Duquenne 氏もルーヴァンにおける Lamotte 教授の門下である。

この法宝義林研究所に、Lamotte 教授の御遺言によって蔵書が寄贈されるとのことで、目下搬入の準備をすすめているということである。ルーヴァン・カトリック大学の東洋学部には、Lamotte 教授御退任後、仏教学の講座は設けられていないが、教授の蔵書が海を渡ることになったのは、この研究所に Durt 氏や Duquenne 氏という Lamotte 教授の門下の方がおられる因縁によることが最大の理由であろう。しかし Lamotte 教授の御遺志は、仏教学のさかんな、しかも仏教国である日本へとお考えになったのではないかと推察申しあげたいのである。今を去る二十年ほど前、ルーヴァンに Lamotte 教授をお訪ね申しあげたとき、「仏教の勉強をするのにヨーロッパに来る必要があるのですか。」と言われたことが私には痛切であった。ヨーロッパ人である Lamotte 教授と、我々日本人とには、伝統と経験の相違があるし、我々がヨーロッパに学ぶべきことは今なお多く残っている。しかし、仏教という伝統をもった我々

は、その研究法を常に追い求めてゆく必要があるようである。

註

① INDIANISME ET BOUDDHISME Mélanges offerts à Mgr Étienne Lamotte 中の D. Donnet の教授 "L'œuvre de Mgr Étienne Lamotte" の参照

② 同

③ 同

④ これについては桜部建教授が紹介している。「ローカパンニャッティについて」(『パーリ仏教文化研究』一九八二) pp. 23-32.

〈写真に添えて〉

前掲の写真二葉は、一九八二年七月一日、ブリュッセルのお宅にラモート先生をお訪ね申しあげた折に写したものである。筆者撮影のこの拙い写真が、先生最後のお写真になったとのことで、恐縮に存じあげている次第であるが、先生の御逝去はそれより十箇月後の、翌年五月初旬のことであった。

以前、一九六七年にルーヴァンの御書斎にお訪ね申しあげたことがあったが、一九八二年の折には、ラモート先生はルーヴァン・カトリック大学を御退任後、ブリュッセルに居を移されておられた。たまたまブリュッセルに帰省されていた、法宝義林のH・デュルト氏が同道してくださって、ラモート先生のお宅に参上したことであった。

ラモート先生は御病後であり、目も病まれていたし、訪問時間は一時間位でと前以てデュルト氏と話し合っていたのであったが、先生のお宅では、ラモート先生と御令姉とデュルト氏と、それに私も加わって、サロンでの歓談は仲々に楽しく、予定の時間はとうに過ぎてしまった。

それから先生の御書斎に招じ入れられたが、相変らず『大智度論』訳註のお仕事を続けておられた。既刊の第一巻から訂正版をお出しになる御予定とのことであった。その折は、支謙訳『義足経』の一節の解釈が問題となっていた。先生はテキストに目を近づけて、五・六センチのところで御覧になっていたが、なお膨大な仕事に立ち向かう気迫に満ちていた。

その御予定は残念にも中途になったが、先生が既になされた訂正補遺の分については、デュルト氏によって刊行の運びになるということである。

そしてなお最後まで、孜孜たる研学の態度を示された碩学の、あの格調の高さは、今以て私の脳裏を離れることがない。